

イエリネクと言説分析の(不)幸な遭遇

井 上 百 子

エルフリーデ・イエリネクの作品は、社会批判的だといわれる。この観方は彼女が作品を発表し始めた 1970 年代初頭にすでに見られ、2 作目の散文『ミヒャエル——おバカな社会のお子さまのための本¹』(1972) の書評には、「メディアの現実に対し批判的な[姿勢をとる]²」と書かれている。イエリネクの文学作品に関する最初の入門書を手がけたマルリース・ヤンツは、イエリネクの作品の政治性に着目し、彼女を「政治的な作家³」だと紹介する。近年発表されたリュッケの研究でも「イエリネクが芸術を通して、行っているのは[様々なものの]化けの皮をはぐという政治的なプログラムの実行だ⁴」という記述が見られる。このことから、彼女の作品から社会批判的な態度を持つ政治性が見られるという認識は、イエリネクの作品研究で一貫しているといえる。

また、イエリネク自身もあるインタビューのなかで、芸術に対して蔓延する「《芸術なんて個人的なことだ》⁵」[„Kunst ist Privatsache“]という認識ゆえに、芸術の政治的な側面が不能だと見なされている現状を批判している⁵。インタビューのなかでも括弧つきで記された標語のような言い回しは、1970 年代の第 2 波フェミニズムのスローガンとして知られた「個人的なことは政治的なこと[Das Private ist politisch (The personal is political)]」を思い起こさせる。このスローガンをヒントと読むならば、イエリネクの発言は、個人的だと見なされてしまう芸術は個人的なことではなく政治的だという作家の意見表明として理解できる。彼女は、時にははっきりと目に見える形で時事問題を題材

¹ Michael – Ein Jugendbuch für die Infantilgesellschaft. 以下では、『ミヒャエル』と省略する。

² Springer.

³ „[P]olitische Autorin“ (Janz, p. VII). このとき「政治的」という語は、ほとんどマルクス主義的な色を帯びた「啓蒙主義的イデオロギー批判」の同義語として使用されている。

⁴ Lücke, p. 79.

⁵ Jelinek, 2000.

の1つとし、文学的なテキストを通して、政治的に働きかけを行っている。

イエリネクの作品に見られる社会批判や政治的な態度は、明らかであるにもかかわらず、この特色は作品分析から十分に論じられているとはいえない。イエリネクのテキストにおける社会批判が論じられる場合、多くの論者は彼女がマルクス主義者である点を根拠にあげる⁶。だが、彼女の実生活レベルでの政治的な姿勢を作品が描き出す態度として読むことは、テキストの分析の結果として文学テキストによる社会批判を読み取ることは異なる。本論文では、これまでの先行研究においても論じられてきた社会批判という観方を、イエリネクの実生活と混同せずに読み取り、彼女の書き方を論じるための方法を考察する。その際、イエリネクのテキストにおいて、反復される論理を持つ言説が使用され、またその言説が分析されていることに注目する。言説の分析は、同時に、権力の分析でもある。この視点からイエリネクのテキスト分析にミシェル・フーコーを起点とする言説分析の方法を組み合わせることで、イエリネクの社会批判性をテキストから読み取る方法を探りたい。さらにこういった考察と並行して、なぜ言説分析という方法論がイエリネクのテキストを読む際にほとんど用いられてこなかったのかという問題も論じる。この問いは、イエリネクがドイツ語圏のドイツ語圏文学という領域において最も盛んに研究されていることと関連している。この観点から、ドイツ語圏のドイツ語圏文学における言説分析の受容を1つの論点とする。本論文では、イエリネクと言説分析を出会わせることで、イエリネクのテキストにおける社会批判性を明らかにするとともに、なぜイエリネクと言説分析が不幸にもすれ違ってきてしまったのかを描きだしたい。2つの問題は奇妙な交差を見せるはずだ。

1. イエリネクにおける言説分析

まずはイエリネクの文章を読むことから始めよう。彼女はこういった文章を書き、読者である私たちはそこから何を読み取れるのだろうか。イエリネク自身は自分のテキストについて次のように説明している。

⁶ 例えば、Janz を参照。

私は、すでに存在する発言を登場人物たちに言わせることで、作品のなかにさまざまな言語の次元を作り出している⁷。

ここでは2つのことが述べられている。1つ目は、登場人物たちの語る言葉は「すでに存在する発言」だということ、2つ目は作品には「さまざまな言語の次元」があるということだ。この2つの特徴に着目しながら、実際に、彼女の文学テキストを見ていこう。

あんたたちのことでひとつ気に食わないことがあんのよ。いっつも誰かのせいにするところ。階段から転げ落ちるときや車に轢かれるときや職を失うときにはもっとちゃんと見なきゃいけないのよ。

そんなときにはそう画像鮮明度を合わせる。〔調節用の〕つまみは目で見て分かるくらいの大きさはあるでしょ。ねえ違う？あんたたちのうち何人かはそういうことに関しちゃれっきとした小さな専門家に成長済み。残りの子はまあしっかりお勉強しなくちゃね⁸。

これはイェリネクの2作目の散文『ミハエル』からの引用である。引用文中には、読者に直接語りかけるような語り手がいるが、この語り手は1段落目で2人称複数形の「あんたたち」に対して、攻撃的な調子で、「気に食わないところがある」と宣言する。その

⁷ „Ich erziele in einem Stück verschiedene Sprachebenen, indem ich meinen Figuren Aussagen in den Mund lege, die es schon gibt“ (Jelinek, 1984, p. 14).

ドイツ語の原文が論旨に関わる場合には、脚注に原文を挿入するか、原文の引用が短い場合には本文に括弧をつけて記す。なお、本論で言及する文献に、フランス語原文の文献がドイツ語訳で引用されている場合には、両言語の文献を引用することもある。その場合は3ヶ国語でタイトルを併記はせず、フランス語は「fr.」ドイツ語は「dt.」と表記する。

⁸ „bloss eines stört mich an euch: immer sollen die andren schuld sein. ihr müsst schon besser schauen wenn ihr die stiege herunterfallt oder überfahren werdet oder eure stellung verliert. /da stellt man eben die bildschärfe genauer ein. der knopf ist doch wohl gross genug dass ihr hin seht. nicht? manche von euch haben sich dabei zu richtigen kleinen fachleuten entwickelt. die andren müssen allerdings noch fest üben“ (Jelinek, Michael. p. 7). 女言葉で訳したが原文では「私」の性別までは判断できない。なおこの作品では、点と大文字は使われていない。以下では原文で言葉遊びをしていたり、日本語から原語に遡ることが困難な単語は角括弧で表す。筆者による補足は亀甲括弧で表す。

理由は、あんたたちが「いつも人のせいにする」からだ。語り手は他人への責任の擦り付けを非難している。この発言は、言い換えれば、人のせいにするな、ということだ。読者は語りに慣習的用法を照らし合わせて、攻撃的な調子や非難の内容を読み取る。その意味でこれは「すでに存在する発言」の使用である。続く 3 行目で語り手は、「階段から転げ落ちるとき」、「車に轢かれるとき」、「職を失うとき」という状況では、「もっときちんと見」ろと要求する。この 3 つの例は、明らかに避けるべき事態を指している。個別に考えてみよう。「階段から転げ落ちるときには…もっときちんと見なきゃいけない」というのは、階段から落ちないように気をつけろという注意である。階段と訳した原語、**Stiege** は一般的な「階段」を意味するほかに、「急で幅の狭い階段」や「はしご」という意味ももつ。それを念頭に置けば、その階段(**Stiege**)は上り下りがしにくいから落ちないように気をつけなさいという意味だから、ありがたい注意ともいえる。「車に轢かれるときには…もっときちんと見なきゃいけない」という 2 つ目の例は、奇妙な言い方だ。「車に轢かれるときには」ちゃんと見ようが見まいが、既に手遅れだからだ。しかも車にはねられれば、死に至る可能性も否定できない。その意味で、2 番目の注意は、日常レベルで使うことがない言い方であり、もし言うとしても心無い言い方、より強く言えば、非常識で失礼な言い方だといえる。3 番目の例は「職を失うときにはもっとちゃんと見なきゃいけない」というもので、これも 2 つ目の例と同様で、普通ならばその自体を防ぐべく事前に注意すべき事柄を指す。そして何より、3 例中後半の 2 例は通常の用法から離れた使い方なので、執拗な印象を与える。

だが、この執拗さには意味がある。3 つの例を重ねることは、皮肉の合図(**Ironiesignal**)として機能しているからだ。皮肉とは、字義通りの意味のほかに、送り手(書き手)から受け手(読み手)に送られるもうひとつの意味のことであり、皮肉の合図はその皮肉の存在を受け手に知らせる合図を指す。上記の引用文の場合、後半の 2 つの例は日常語レベルでは冗談でない限り、非常識な発言であり、しかも 3 つも例が続くことから、読み手に「(字義通りではない)メッセージあり」という皮肉の合図として送られている。この合図によって、読者は語り手の瞬間的な判断に対して疑問を投げかけ、もう一度その内容を考え直す契機を得る。ここではいかなるメッセージが送られているのだろうか。「階段から転げ落ちるとき」という最初の例に皮肉の合図はかかっている。つまり「階段から転げ落ちる」の文字には現れないもうひとつの願意された意

味を理解すれば、皮肉を読み取ることができる。「階段から落ちる」という言い方は、身体的な暴力を振るわれていることを間接的に伝えるときに使われる。この間接的な言い回しは、家庭内暴力やいじめのように陰でなされる行為を隠すために、自分の不注意で傷やあざができてしまったという用法だ。ここから「階段を転げ落ちる」のもうひとつの意味は、「身体的な暴力を受ける」ということだと分かる。

身体的な暴力を受けるときにはもっときちんと見なくちゃいけない、というメッセージは、暴力を振るわれるのは振るわれる側に注意が欠如しているからだ、という内容を含んでいる。殴られる側、すなわち被害者に対して、きちんと見ていないからお前たちは殴られるんだ、と責めるならば、それは被害者をさらに傷つける。身体に対する暴力と言語による暴力は完全に一致しないものの、このような言葉による暴力は弱者の側に追い討ちをかける上に、弱者の側に責任を転嫁する。さらに、「暴力を振るわれている」と言う代わりに「階段から落ちた」と述べる言い方はもう 1 つの問題を含む。それはこの用法が暴力という事実を直接的に表す言い方でないために、聞き手が含意された問題を理解したとしても、暴力による被害の拡大を引き止める対策を取るような問題の解決は語られないからだ。間接的な暴力の告発が結局のところ告発として機能しない点において、「階段を転げ落ちた」という言い回しは、被害者を元の位置に置き去ることを許容してしまっている。被害者の告発を告発として受け止めない状況は、この言葉の用法が、社会的に固定されてしまっている以上、個人的な暴力に還元できない。その意味で語り手の発言は 2 重の暴力を内包している。

引用の 1 段落目では、責任転嫁のなされ方が描かれている。はじめは責任転嫁が良くないと「あんたたち」を叱り、次には語り手自身が責任を押し付ける役になっているが、テーマ自体にぶれはない。テキストはテーマを提示するだけでなく、3 行目に皮肉が用いられることで、いかに暴力が生じるかを考えるようにと読者を促す。こうして読者は暴力が引き起こされる仕組みを考えることになる。

引用の 2 段落目はどうだろうか。ここでは前の段落とは素材が変わり、テレビないしはカメラのピント調整が話題となる。この段落では、けんか腰の調子はないが、代わりに教育の現場で使われるロジックが入り込む。1 行目ではピントを合わせる対象は明確ではなかったが、2 行目になると「つまみ」という単語が使われ、テレビについて語られていることがはっきりする。語り手は、つまみは十分大きいのだから自分で見えるし、

見えるんだったらピントは合わせられるでしょう、と言ひ、理解を行動に移せと迫る。これは相手に訓練をさせたり、教えたりする場合に用いられるような言い方で、一般的には大人が子どもに対して使うことが多い。この教育現場で使用される論理が組み込まれることで、教える側にある語り手「私」と話しかけられている「あんたたち」の間に、年齢差が生み出される。続いて、語り手は「あんたたちのうち何人かはそういうことに関しちゃれっきとした小さな専門家に成長済み。残りの子はまあしっかりお勉強しなくちゃね」と「あんたたち」を小さな専門家とそうでないものとに二分する。その上で、まだ専門家になっていない者に対して、(専門家を目指して)勉強しろと要求する。ここには業績主義の価値基準が導入されており、そういったロジックに則った語りが展開されている。業績主義の論理では、次から次へと成果をあげることが求められ、成果をあげた者のみが肯定される。つまりここでの要求は、業績主義の価値基準を押し付けでもある。同時に、一人前のテレビ操作が肯定的な評価の対象になっている。子どもたちはテレビの前に鎮座し、より良い操作の習得を期待されているのだ。否定的な言い方をすれば、子どもはテレビにへばりつけと強制されている。これは教育的観点から見れば、大抵は回避すべき方法だと見なされるだろうが⁹、コマーシャルを放送する企業の視点から見れば、広告効果向上のためには視聴者をテレビに釘付けにすることが望ましい。また、「れっきとした小さな専門家」というのは笑いを誘う^{アイロニカル}、皮肉な表現になっている。専門家というのは一定以上の訓練を受け、経験を積んだ大人のことを指す用語だから、ここでは年齢的に小さな人(子ども)を表す形容詞と大人であるはずの専門家の組み合わせは不自然である。その上さらに「れっきとした」という形容詞が付くことで皮肉となっている。このせいで、業績主義を基盤にしているかのような言い方は、真剣な語りというよりも、誇張の目立つ語り、またはオチがついた語りになっている。

2 段落目でも、語り手の立ち位置^{ポジシヨシ}に変化が見られる。1 段落目とは違い、責任転嫁という1つのテーマのなかで賛成と反対の立場を替えるのではなく、2 段落目では、語るための土台自体を教育現場の言い方から業績主義的な言い方へと鞍替えしている。語る位置が変化することとは、言い回しや常識、行為基準、推奨されることの内容

⁹ 但し、教育番組を考えるならば、テレビは教育の1つの媒介である。

など様々なものにも変化が起きる。イェリネクのテキストの語り手は、位置を替えながら語る。読者は、語り手が何を基準に、いかなる論理に則って語るのかを読み解かなくてはならない。この位置や論理を生み出し、可能にするものを言説と呼ぶ。なお、こういった語りの内部で引き起こされる言説の切り替えによって、イェリネクのいう「さまざまな言葉の次元」が生じていることが分かる。「さまざまな言葉の次元」とは、さまざまな言説のことだ。

言説を組み合わせ、それぞれの論理を用いることは、言説の機能を分析することである。その際、言説は論理を押し付け、人がそれに従わされるという意味で、権力と関わっている¹⁰。「階段から転げ落ちる」という例は、間接的な方法でしか言い表されないことで事態を隠し、不可視にする権力と、間接的な言い方を被害者に使わせ、隠さなければいけない状態を生み出している権力を、皮肉を通して見せる。言説が生み出す権力が、いかに発生させられているかが分析されるとともに、問題を明白にするために身体的な暴力や言語による攻撃が使われてもいる。このように、イェリネクは言説が何をどのように生み出しているかという分析を文学テキストで行っている。

イェリネクと同様に言語を新たに生み出せるものとしては捉えず、言葉を中立なものだとは考えなかった人物としてミシェル・フーコーの名前をあげることができる。彼は、テキスト講読を分析過程の中心に据えるものの、テキストそのものを分析するというよりもテキストに内包された言説を分析対象としている。言説という概念は、先にあげたイェリネクの使用言語の認識、既存の言語使用によく似ている。なぜなら、フーコーにとって言説は、誰かが新たに作り出せるものではなく、既に存在していたものが繰り返し使用されることで生じるものだからだ¹¹。さらに、言説は中立的ではなく、イェリネクのテキスト分析から見えたように、強者と弱者を生み出したり、攻撃を可能にしたり、攻撃

¹⁰ Butler, Judith: *Excitable Speech. A Politics of the Performative*. Routledge, New York, 1997 (『触発する言葉——言語・権力・行為体』、竹村和子訳、岩波書店) や同著者の *Precarious Life. The Powers of Mourning and Violence*. Verso, London/New York, 2004 (『生のあやうさ——哀悼と暴力の政治学』、本橋哲也訳、以文社、2007) の2章を参照。

¹¹ 特に、ミシェル・フーコー『言説の秩序』を参照。邦訳は『言語表現の秩序』だが、ここでは原書のタイトル通り『言説の秩序』と訳し、頁を示す際には邦訳のタイトルをそのまま明記する。

に使われたり、評価したり、強制的になったりもする。両者の共通点を前提とすれば、イエリネクは、フーコーの用語でいう言説を分析しつつ、1 つのテキストを作り出しているといえる。

けれども、これまでイエリネク研究において、フーコーの方法論はあまり生かされてきたとは言えない。エヴァ・ルトゥヴィガ・サライは、イエリネクの戯曲『病あるいは現代女性[*Krankheit oder Moderne Frauen*]』(1987)を、フーコーによる権力分析を応用しながら論じている。彼女は、イエリネクとフーコーが、自然なものとして見えている現代の制度や実践を疑い、それらが実は権力や支配による偶然の構成であることを描く点で共通性していると述べる。そして、女性が医学的な視線によってどのように女性として主体化させられていくのか、そういった主体化を迫る社会的な権力関係はどのように生み出されているのかを、イエリネクが戯曲という形で描いていると分析する。サライは、ジェンダーが構築される社会を、イエリネクがいかにテキストで書き表しているのかを主な論点にしている。この論文で、サライはそれ以前の先行研究における問題を次のようにまとめている。イエリネク研究で権力という問題が触れられる場合、「マルクス主義者イエリネク」という作家のポジションを議論の土台にすることで論が展開される。この考え方は、男女の関係が男性の主体による支配とそれに抑圧される女性の主体といった権力関係を一貫して想定している。イエリネク研究においてかなりの影響力を持つこうした見解に対してサライは、「これは[こういったアプローチは]私にとって、不十分で危うく一方的に見える¹²⁾」と述べている。彼女は権力を支配・被支配のように単純には捉えておらず、いかにして支配・被支配関係が作り出され権力となるのかを描かれていると分析する。そこで彼女は、フーコーの『臨床医学の誕生』や『知への意志』を参照し、その類似性を提示している。

また、ヘルト・ヘーゼルハウスは、イエリネクの小説『ピアノ弾きの女[*Die Klavierspielerin*]』¹³⁾(1983)について論じた多くの二次文献の分析を批判的に考察し、イエリネク自身が言説分析的にテキストを書いていると述べる。ここで批判対象となった二次文献は、『ピアノ弾きの女』を作家自身の自伝として解釈し、小説に描かれたこ

¹²⁾ Szalay, p. 238.

¹³⁾ 邦訳は『ピアニスト』、中込啓子訳、鳥影社、2002.

とを精神分析の事例として扱う。この「主流」の分析傾向に対して、ヘーゼルハウスは次のように書く。

『ピアノ弾きの女』は決して事例となる物語[Fallgeschichte]ではない。すなわち、ピアノ弾きの女[小説レベルではエリカ、あえて現実と混同するならばイェリネク]という實在の対象[Objekt]の変遷や病を精神分析的に記述するものではないのだ。この作品が描くのは、むしろそういった考え方の背景を問うこと、そういった考え方に対する皮肉や批判である。ここで扱われているのは、精神分析の事例＝事実[Fall]ではなく、何が精神分析的に——したがって言説的に——事例＝事実でありうるかだ。つまり最終的には言説分析的な認識批判、受容批判——つまりは文学[文献]批判——が重要なのである。しかも、そのやり方は極めて鋭く、風刺的だ¹⁴。

ここで批判されているのは、小説や小説を書く作家を精神分析の分析対象として解釈しようとする試みである。『ピアノ弾きの女』には、確かに精神分析のロジックが散りばめられているが、そのテキストを精神分析の手法で解釈するのでは、テーマが見えてこないとヘーゼルハウスは述べる。彼女は精神分析的思考がこの小説で使われている意味を問わなくてはいけないという。そして、問題とされているのは精神分析に従って考えるとはどういうことなのか、という問いがイェリネクのテキストにおいては問われている、と述べる。テーマとなっているのは、認識であり、そこにあるとされる対象の精神分析ではない。

取り上げた 2 つの先行研究は、存在しているかのように見えているジェンダーや精神分析という方法が、いかにそのように認識されているのかを問い直すテキストとして、イェリネクのテキストを読んでいる。そしてイェリネクの方法を、ポスト構造主義的、かつ、批判＝批評的だと見る見方も両者に共通している。両者が他の多くのイェリネク研究を批判しなければいけないことを見ても、彼らの立場がイェリネクのテキストを扱った研究のなかで、特異なことは明らかである。

先に見たイェリネクの短いテキスト分析からも、以上の先行研究の指摘からも、イェリ

¹⁴ Heselhaus, p. 98. 引用中に使われている Fall は、精神分析での事例研究の事例とヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考 [Tractatus Logico-Philosophicus]』の 1 行目に書かれた事実(邦訳では実情)という 2 重の意味で使われている。

ネクは、存在していると考えられているものはいかにしてそのように認識されているかを問い直していることがわかる。またその存在や認識が生み出す権力がいかに機能するかを描き出すことが、それを問題として扱う彼女の文学的な分析が批判的視点を見せる。こういった研究方法は、イエリネクの文学テキストを通じた、社会に対する働きかけを読み解くために大きな助けとなる。それにも関わらず、なぜ、イエリネク研究において言説分析という方法論は浸透していないのだろうか。この問題を論じるために、イエリネクのテキスト研究が最も盛んに行われているドイツ語圏のドイツ語圏文学に目を転じこの領域で言説分析がどういった方法論だと考えられ、その方法論の応用によりいかなる論点が深められるのかを考察しよう。

2. 間言説分析——ドイツ語圏のドイツ語圏文学研究における言説分析の受容

現行の文学研究の研究領域は、書物や解する者の多い言語であれば、基本的に、言語によって区分されている。この慣習的な学問分野のあり方に従うならば、イエリネクの作品はドイツ語圏文学の研究対象となる。作品の書かれた言語が 1 つの領域を形成するのに比べ、文学作品を分析する方法論は複数の領域を超えて応用されることが多い。だが同時に、領域ごとに異なる理論的展開もある。つまり、イエリネクの文学テキストの分析はドイツ語圏文学という枠組みの中で論じられ、その中で理論的展開に依拠している可能性が否めない。このため、まず、本論文ではドイツ語圏文学研究という分野で、言説分析という方法がどのように論じられているかを確認する。そしてその枠組みを用いてイエリネクのテキストを分析し、この議論がイエリネクのテキスト分析にいかなる効果をもたらすか、またもたらさないかを批判的に検討し、そこで浮上する問題点を明らかにしたい。

ドイツ語圏の言説分析を概観的に理解し、なぜイエリネク研究の中で言説分析が活かされていないのかを明らかにするために、ドイツ語で書かれた文学事典で「言説分析」の項を参照することから議論を始めたい。ドイツの文学研究のなかでごく一般的に使用されている『メッツラー 文学・文化理論事典[Metzler Lexikon Literatur- und

Kulturtheorie]¹⁵』の「言説／言説理論」の項は、言説と言説理論を以下 4 点に分類し、概念を説明している。そこでは、A) 言語学でのディスクール分析、次にドイツ語圏の概念である B) ハーバーマスのディスクルス、そして、C) フーコーの言説概念、D) フーコーの言説概念の文学研究における受容(主に、間言説分析)の順でまとめられている。最初にあがった、言語学のディスクール分析は、会話・談話分析とも呼ばれる英米での研究による影響が強い分析方法である。例えば、この方法論には言語行為論が含まれている。ハーバーマスのディスクルスは、統制を逃れたコミュニケーションという相互行為の独特な形式を指す¹⁶。このコミュニケーションは、前提となる条件がほとんどないところで成立し、「合理的[rational]」¹⁷だといわれる。

その後、C と D では、前者 2 つの概念とは一線を画し、現在一般的に言説という概念を論じる際に必ず参照される、フーコーの言説概念とその「発展的」方法論が紹介される。この 2 項が現在、ドイツ語圏で言説分析が話題となる際に必ず参照されるため、細かく確認し、それがイェリネクの文体を読み解く鍵となるかを検討したい。

最後に、1960 年代以降に登場し、それぞれの時代に特有の言表編成が生み出す物質[唯物]性、および、権力や主体の効果をテーマとする思想潮流が言説について語っている¹⁸。

¹⁵ 本論文では『メッツラー 文学・文化理論事典』を分析対象とする。これは、同事典の言説分析に関する項が他の事典に比べ詳細な項目であるためだ。本節での議論を先取りするならば、上記の事典のほかに参照されることの多い事典として考えられる *Metzler Lexikon Literatur* や *Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft* でも、間言説分析という方法論は、フーコーの言説分析を文学研究に応用するために発展させた方法論として、大きなスペースを使って肯定的に記述されている。

¹⁶ 「J. ハーバーマスにおいて、ディスクルスは相互行為の独特な形式を意味する。つまり、すべての経験的な前提条件になる要素が捨象された状態で、きわめて合理的な意見交換を行う「統制を逃れたコミュニケーション」という観念型を目指す形式のことである」(Gerhard; Link; Parr, p. 115)。なお、ディスクルスは Diskurs (言説) のドイツ語読みである。表記は、フーコーの概念との混同を避けるため、ハーバーマスの著作『近代の哲学的ディスクルス』(三島憲一ほか訳)などの規訳に従った。

¹⁷ Gerhard; Link; Parr, p. 115.

¹⁸ Gerhard; Link; Parr, p. 115.

この C の 1 行目の記述には、言説が言表により編成されたものであること、言説は権力や主体と結びついた概念であると記されている¹⁹。だが、言説と権力および主体の関係に関して、この項にはこれ以上詳しい言及はない²⁰。その代わりに、フーコーの分析は学問領域間の差異を前提とした点を強調したとの説明が続く。

M. フーコーの分析を前提とするならば、近代社会においては高度に専門化された学問領域は、それぞれに自らの境界線をはっきりと定めている。こうした学問領域はそれぞれ比較的閉鎖的な専門言説を形成している²¹。

フーコーの議論で前提となる学問領域は、境界により仕切られ、それぞれが異なる専門言説を形成している。学問分野ごとに専門言説が形成されているならば、分野の数だけ専門言説が存在し、言説の閉鎖性のために分野間の対話に何らかの支障を与えると予測できる。専門言説という概念は管見の限り、フーコー自身の用語ではない。だが、事典の説明では、マルクスにおける近代社会の分業の例が持ち出されたり、学問分野の細分化に関する言及や知全体に対置された「知の断片 [Wissensausschnitte]²²」という言葉が専門言説の言いかえとして用いられるなど、各分野の専門言説は重要視されている。ここでは一旦、この説明に従い、フーコーが専門言説を論じたと主張されていることをおさえておくことにしよう。そのほかに C では、フーコー自身は文学テキストという特殊なテキストを分析する方法を提示しなかったとの断り書きがある。

〔知の断片という境界が言いうる／言えないことの規制に基づいているということ、〕(文学)テキストもまた、フーコーに関連付けるならば、〔ひとつの分野

¹⁹ フーコーは『知の考古学』において、言説を言表の総体だと述べている (Foucault 『知の考古学』 p. 179; fr. p. 153; dt. p. 170)。

²⁰ 補足になるが、引用中の「物質 [唯物] 性 [Materialität]」という言葉は、前出のハーバーマスの観念論的思考と対比するため、ないしは、言説が物質的な事柄にも影響を及ぼすという意味で用いられていると考えられる。

²¹ Gerhard; Link; Parr, p. 115.

²² Gerhard; Link; Parr, p. 115.

に留まらず] 広範に波及した歴史的な言説編成の構成要素として、ないしは、リンク(1988)のように、[専門言説を]再統合する間言説の構成要素として理解、分析されなければいけない²³。

この引用では、文学テキストを扱う際の2つの捉え方が並列に記されている。フーコーの述べる言説編成の一部として捉えるか、もしくは、リンクのように間言説として理解するかとの二択である。しかしながら、同項目では、前者についてこれ以上の説明はなく、フーコーが文学研究分野で自身の方法論を展開しなかったという理由から、文学を研究するために編み出された間言説分析の必要性が前面に押し出されていく。ここには、フーコーを文学研究のなかで直接、方法論として使うわけにはいかない、との前提があるようだ。引用文中にあるように、彼らは一方で間言説分析をフーコーの言説分析の(枠に留まらない)さらなる発展だと説明しながら、他方で「ないしは」という言葉を使うことによって、両者を並置し、それらに大差がないかのように記す。そして、すでにCの項で次項において検討される考えを基盤とし、文学研究で言説分析を行うために必要な手続きが説明され始める。そのためCの項目で展開されるはずのフーコーにおける言説について割かれたのは、実際には、C全体の約半分のスペースでしかない。

Dでは、1980年以降に起こったフーコーによる言説理論のさらなる発展が取り上げられる。まず、フーコーの議論になかった視点を導入し、発展させたフリードリヒ・キッター、フェミニズムによる論の発展、精神分析での言説概念の使用がごく簡単に触れられる。その簡素さに対して、大々的に取り上げられるのが80年代以降の言説理論を「一歩進めた[Weiterentwicklung]」とされる「間言説分析[Interdiskursanalyse]」である。

フーコーの言説理論はJ. リンクとU. リンク＝ヘアーの手によって、もともとの言説分析から文学という特殊なケースのためにさらに発展させられることとなった。この二人は、文学の言説を言説要素が堆積する場として、言説的方法の場として理解する。文学の言説は、諸専門言説に分業されて組織化された知

²³ Gerhard; Link; Parr, p. 115.

の再－統合に役立つ²⁴。

間言説分析は、ユルゲン・リンクとウルスラ・リンク＝ヘアーが文学研究のために、フーコーの言説分析をさらに発展させた言説分析だと説明されている。この方法論に従えば、言説要素の積み重なる場として文学の言説がある。すなわち、文学の言説が分業された専門言説を統合する役割を担っているのである。そして学問ごとに、個別に組織化された専門言説に対して、それを統合するのが間言説である、とされる。異なる2つ以上の言説の存在が、間言説分析の大前提である。この事典項目では2つの言説に関する詳しい説明がこれ以上ないため、補足的に、リンクとリンク＝ヘアーの論文での定義を確認したい。

私たちは、フーコーの述べる意味でのそれぞれの時代に特徴的な「言説による編成」を「専門言説」と呼び、そして複数の専門言説間におけるすべての交差し、関連し合い、統合するといった横断的な諸関係を「間言説的」と名づけることを提案する。例えば、同時に複数の専門言説を特徴付けるすべての要素、関連、方法は間言説的であるといえよう²⁵。

先ほど見たフーコーにおける言説の説明と、ここでの専門言説とは完全には一致していない。先ほど私たちが見た例では、フーコーは領域の境目が明確な言説である専門言説を問題として分析したとあったが、上記引用1行目の説明では言説による編成は時代に特徴的なものとして扱われている。定義に一貫性がないようにも見えるが、専門言説はフーコーの研究対象だったとの点で、主張に変わりはない。そして間言説の説明で「横断的な諸関係」という言い回しが使われていることから、間言説に対置される専門言説は学問領域ごとに閉じられているがゆえに相互関係が成立せず、断絶

²⁴ Gerhard; Link; Parr, p. 116.

²⁵ „Wir schlagen vor, jede historisch-spezifische „diskursive Formation“ im Sinne Foucaults als „Spezialdiskurs“ zu bezeichnen und dann alle interferierenden, koppelnden, integrierenden usw. Quer-Beziehungen zwischen mehreren Spezialdiskursen „interdiskursiv“ zu nennen. „Interdiskursiv“ wäre dann z.B. alle Elemente, Relationen, Verfahren, die gleichzeitig mehrere Spezialdiskurse charakterisieren“ (Link; Link-Heer, p. 92.).

的だと捉えることができる。フーコーに関する記述に対する疑問を除けば、事典での記事とここで参照した論文の定義に矛盾はない。領域ごとに境界を持つ閉鎖的な専門言説に対して、間言説は個別にあるものを結びつける働きを持つ。読み手に専門知識が求められないために、間言説は専門言説の平易な言い換えとも読める。そして間言説は常に文学との関連で議論されているため、両者は切り離すことができないようである。また、ここで取り上げたリンクとリンク＝ヘアーの論文の後半節タイトルは「間言説分析としての文学分析[Literaturanalyse als Interdiskursanalyse]」となっており、リンクはこの節と同じタイトルの別の論文も発表している²⁶。この題に関して論文中に明確な説明はないが、「として[als]」という言葉を用いて間言説と文学は対等に扱われている。なお、先ほどCの項で述べられていた通り、間言説分析は文学を研究するための方法論である。そのため、筆者らが文学全体を間言説だと捉えているかどうかは明確ではないが、間言説は文学に含まれていると理解できる。

では、間言説はいかに分析できるのだろうか。言い換えるならば、文学のなかで、閉鎖的な専門言説はどのように他の閉鎖的な専門言説と再統合されるのだろうか。もう一度、事典の項目に戻って確かめたい。

テキスト研究者にとって、ここでとりわけ興味の対象となるのは、言説が〔他分野にも〕広がっていくための原初的な文学要素の総合的なアンサンブルである。そのなかには、アナロジー、メタファー、シンボル、神話、またとりわけ共有シンボルというさまざまなモデルが含まれる²⁷。

テキスト研究者の関心は、「原初的な文学要素」に向かい、原初的な文学要素とは、アナロジー、メタファー、シンボルという修辞学の伝統を持つ概念で把握できるものや、神話だと説明されている。なかでも特に強調されているのは「共有シンボル」という要素である。アナロジーやメタファーといった修辞学的で長い歴史を持つ概念が、言説という概念の導入で変化しうることについての説明はない。だが、事典の記述によれば、アナロジー、メタファー、シンボル、神話、共有シンボルの分析は、間言説の分析と同

²⁶ Link, 1988.

²⁷ Gerhard; Link; Parr, p. 116.

じである。その分析方法に関する説明の前に、事典では、間言説理論的観点から見た文学のパラドクスについて言及が挿入されている。「一方で、文学は自らの編成法則を備えた専門言説である²⁸」。他方で、文学は、包括的には知の百科事典的な集積により、また局部的には多声的な言説を素材に使用することで、通常の使用範囲を超えて波及する要素を用いもする。これらの要素によって、文学でのパラドクスや意味の結合可能性は累増する²⁹。文学は独立した法則を持つにも関わらず、複数の言説を内包する不調和も抱え、この点が他の専門言説との差異になるようだ。後者の例は、さまざまな領域の知が一同に介するような百科事典的な知という表現や、1つの声ではなく多声の言説という言い方で、同時に複数のものが同居する状況を言い表している。確かに説明自体は、文学がさまざまな言説を素材として使用し、それがパラドクスだといわれているが、文学のもつ編成法則についての説明はない。ただし、間言説という複数の専門言説をつなぐ言説が文学の言説であるという点と、文学自体が専門言説でもあるという文学の二重構造的特殊性が強調されていることから、間言説分析の議論は、他の分野と一線を画す文学の特色を説明しようとしているようにも見える。

この説明のあとで、共有シンボルの具体的な例が登場する。例として挙げるのは、教養層を対象に発行されていた新聞『教養層朝刊[Morgenblatt für gebildete Stände]』(1807-1837)の創刊に際して書かれた発行人J. F. コッタ³⁰と創刊号に掲載されたジャン・パウルの文章である³¹。この新聞は文学と芸術を中心に上げる新聞で、現代の日刊新聞とは異なり、日本語では雑誌と訳す方が適切かもしれない。筆者らはコッタとジャン・パウルの文章を比較し、前者が(新聞という形で)専門言説および多様

²⁸ Gerhard; Link; Parr, p. 116.

²⁹ Gerhard; Link; Parr, p. 116.

³⁰ ヨハン・フリードリッヒ・フライヘアー・コッタ・フォン・コッテンドルフ (Johann Friedrich Freiherr Cotta von Cottendorf; 1764-1832) は出版者として名を馳せた人物で、政治的な影響力も持っていた (Brockhaus Enzyklopädie, Bd. 6, p. 103)。

³¹ この新聞は、文学と造形芸術のための新聞である (Kuhn u. a., p. 42)。また、事典記事に取り上げられたジャン・パウルの文章「朝刊の未来的結末に際して別れの言葉を[Abschieds- Rede bey dem künftigen Schlusse des Morgenblatts]」は、クーン他著『コッタと19世紀[Cotta und 19. Jahrhundert]』からの孫引きである (Kuhn u. a., p. 47)。

な読者を統合しようとし、後者は共有シンボルを用いて再統合に貢献しようとしたと引用を交えて記している。後者の例の作者であるジャン・パウル (1763-1825) は、リンクが好んで間言説を描く作家として取り上げる 1 人で、ポーブやスウィフト、ルソーの影響下にあった風刺的作風が有名な作家である³²。また彼のユーモアに富んだ現実批判的な語りは、非常に饒舌で、脱線を繰り返し、アクロバットのな比喻を散りばめたものである³³。ジャン・パウルは「朝刊の未来的結末に際して別れの言葉を」という文章のなかで、「Eine Zeitschrift, diese Dutzend- und Terzinen-Uhr der Zeit, muß mit der Zeit fortgehen, wie jede Uhr und sogar fortfliegen³⁴」と書く。彼はここで、雑誌を、「時間のダース時計やテルツィーネ時計」と言い換え、雑誌は「時計のように時間とともに歩み続けるだけではなく、飛んで行かなくてはならない」と記している。間言説分析の説明では、この文中にある「時計」が間言説の例となっている³⁵。間言説分析者の見解に従うならば、時計は雑誌のメタファーとして機能しており、かつ複数の専門言説を結び付けている。例えば、この引用文中で、時計は出版業³⁶、機械工学と韻律論の間に位置すると考えられる。「時計」が多分野に関連し、かつ比喻であることが「時計」を間言説と見る理由なのだが、ジャン・パウルの文中で「時計」という単語が選択された理由や、効果についての説明はない。彼の文中にこの単語が登場することによって、「時計」という単語がいくつかの分野をつなぎ合わせていると述べられているだけである。間言説分析論者らは、「時計」という言葉を第一義的には、例えば機械工学の専門用語として捉える。そしてジャン・パウルが誰もが目にするテキストのなかで、この専門用語を使うときには、単語の専門性が削がれ、メタファーとして機能し、さらには他の専門分野である出版業や韻律論を結びつける役割を作り出すと言いたいようである。例に上がるジャン・パウルのテキストを文学に分類できるかは検討を要するが、誰もが

³² *Der Literaturbrockhaus*, Bd. 4, p. 292-293.

³³ 藤井、p. 120.

³⁴ 「時間のダース時計、テルツィーネ時計である雑誌は、時計のように時代とともに歩み続けるだけではなく、飛んで行かなくてはならない」 (Jean Paul, p. 3)。

³⁵ Gerhard; Link; Parr, p. 116.

³⁶ 出版業はおそらく学問とは呼べないが、間言説主義論者らの説明にしばしば登場する分業という点から考えるならば、出版は独立した業界であるゆえに、専門言説と言えなくもない。

手に取れる文章で学術用語がメタファーのように使われる場合に、間言説分析者らはその言葉を「間言説」と名付けている。

だが以上の解説では、この短い例にも見られるジャン・パウルの風刺的特徴やアクロバットのな比喩はまったく問題になっていない。事典の項目では触れられていないジャン・パウルの文学的特徴は、例文でいかに顕著に現れているのだろうか。『教養層朝刊』の創刊に際して書かれたテキストに、彼は「朝刊の未来的結末に際して別れの言葉を」という文章を載せた。創刊とは正反対のタイトルからも、すでに皮肉、もしくは、読者を楽しませようとしているテキストを分析してみよう。雑誌が時計の比喩で語られるのは、12 の単位で 1 周する月と時間が共通項を持つと同時に、雑誌も時計も一定の周期で規則正しく更新され（発行され、時を刻み続け）るという中断なく繰り返される営みが共通しているためだと考えられる。さらに12という数字は、12が1単位である「ダース」という言葉で強調されている。それに続く「Terzine (テルツィーネ)」という三韻句法（三行詩節）は、ダンテが『神曲』で用いた韻として有名で、文末の韻が *ababcb-bcb-cdc-ded* となる韻を指す³⁷。3 行連で書かれた詩の 2 行目だけが、次の連の 1 行目および 3 行目と一致する韻である。3 の 4 倍数が 12 であることや、この韻が常に一定の調子で変化を伴いながら進んでいくために、ここでは時計と結び付けられて考えられている。そして後半部には *fortgehen*（歩き続ける、進行する）と *fortfliegen*（飛び去る、（字義的には）遠くに飛ぶ）という 2 つの動詞が使われている³⁸。1 つ目の動詞は時計に対しても雑誌に対しても使うことができ、2 つ目の動詞には「飛ぶ *fliegen*」という文字が入っているところから、何らかの情報を広めるのに一役買った *Flugschrift*（冊子、パンフレット）を想起させる。冊子は不定期発行という点で、雑誌とは多少異なる性質を持つが、冊子と雑誌の機能には類似もある。このように共通性への着目から、時計と雑誌は重ねられ、パラレルに表現されている。一般的にあげられるジャン・パウルの特徴はこの文章にも十分に表れており、皮肉、言葉遊びやメタファーが確認できる。しかし、こういった文体の特徴に対する考慮は間言説分析では見られず、言葉遊びなどの文体は分析対象になっていない。間言説分析では、「時計」のような単語に

³⁷ またこの韻律は、15 世紀には風刺のなかでもよく使われた。*Der Literaturbrockhaus*, Bd. 8, p. 57.

³⁸ この 2 つの動詞は同じ前つづりを持つため、頭韻ともいえる。

注目するあまり、単語より大きな視点からテキストを分析する手段がなくなってしまうているのである。

本論文での要約の長さからも判断できるように、『メツラー 文学・文化理論事典』の「言説／言説理論」の項目にある4節のなかで、最後のDは他の3つに比べて段違いで長い。この項目内でのスペースの配分と本項目の筆者には、明らかな関連性が見出せる。この項目の筆者の1人は間言説分析を論じる中心的人物のユルゲン・リンクであり、もう2人の筆者は、何度もリンクと共に論文を発表しているロルフ・パーとウーテ・ゲルハルトである。つまり、「言説／言説理論」という項目は、項目内で最も多くのスペース配分を受けた間言説分析の支持者の手で書かれているのである。間言説分析論者らの執筆した本項目では、AからDの4節構成で言説および言説分析に関する解説が続くが、Dは全体の約半分の長さを占め、Dではほとんど間言説分析だけが説明される。また、この節では、項目で唯一の例や引用があり、特別に扱われている。また既に述べたとおり、概観を描いた記述およびCにおいても、「専門言説」、「リンク」などの間言説分析にのみ関わる言葉が使われており、間言説分析に関わる記述はDの枠に留まらない。つまり、全体から見ると、優に事典項目の半分以上を超える行数が間言説分析の説明に割かれている。この実態は、『メツラー 文学・文化理論事典』に特有のことではなく、2009年末に出版された別の文学理論事典にも見られる³⁹。それに対し、間言説分析という研究方法自体や、間言説分析が文学研究での言説分析の唯一の応用であるかのような説明を批判的に見直す試みはほとんど存在しない⁴⁰。この状況は、ドイツ語圏のドイツ語圏文学研究で言説分析と呼ばれる方法

³⁹ Parr を参照。

⁴⁰ 言説分析を論じたドイツ語の文献のなかで、間言説分析という方法論に多少なりとも懐疑的な記述を私は1つしか知らない。2人の著者は、文学研究のなかでフーコーの言説分析を引き継いだものとして、精神分析の傾向の強い言説分析と歴史哲学的傾向の強い言説分析があると述べ、フーコーとは袂を分かち3つ目の見解に間言説分析をあげる。3つ目にあがった間言説分析についての説明には、下記の記述がある。「〔間言説分析という〕言説分析の3つ目の見解は、〔上述の言説分析に比べて〕フーコーのそれからかなり離れている」(Köppe; Winko, p. 353)。著者らは、間言説分析の何がフーコーと異なるかにまでは言及していない。だがフーコーとの距離に触れつつも、言説分析についての説明のなかで間言説分析を無視せずに取り上げている。

論の主要な方法論として、間言説分析が、批判にさらされることのない特異な位置を占めていることを物語っている。

これまでに確認したように、複数の専門言説は「原初的な文学要素」である共有シンボルのなかで再統合されており、それが文学の分析となるという認識を持つことが間言説分析だといえる。間言説とは、何か新たな機能や意味を持たせるために使われた単語というよりも、専門言説として学術的な意味を付与され、その後、他の次元でも広まった単語のことである。本来的な用法の場として専門言説が想定されているからこそ、分析者はその単語を元の専門言説領域へと分類し直すことが可能となる。この見方に従えば、単語には起源と応用があるともいえよう。その関係はワンパターンであり、文脈に依存した意味の多層性などは考えられない。そのため特定の単語を使うことが文学の中で何を象徴しているかはここでは問われず、ジャン・パウルにおける「時計」という単語の使用だけが確認され、テキスト内で「時計」という単語がなぜ用いられ、どう機能しているかは考察対象にはならないのである。

多分野での同一の単語使用を論じる間言説分析の立場に立つ者たちは、18 世紀末から 19 世紀の文学を取り上げ、それらの文学が百科事典的な特徴を持つ点に注目する。百科事典は、様々な学問体系を網羅的に取り上げるという特徴を持つ。そのため 1 つの項目に、複数の学問に関係する概念は、学問ごとの視野から見た概念について多角的な説明がなされる。このような百科事典の書き方は、複数の学問体系の同時性を訴える間言説分析指示者にとって、都合のいい例である。例えば、リンクとリンク＝ヘアーはバルザックの「あら皮 [*La peau de chagrin*]」という作品のなかに登場する、不思議な革を取り上げる⁴¹。この作品で不思議な革は、複数の学術的方法から調査対象となる。この例を用いて彼らは、不思議な革が多様な学問の交差点点になると主張し、それが間言説分析研究の見解では、複数の学問が交差するのが間言説、換言すれば文学の言葉の判例となる。だが、ここで、間言説分析研究者が好んで取り上げる例が 18 世紀末から 19 世紀の文学であり、まさにその時期に百科事典が各国語で成立していったという歴史的な背景との関連性は検討されていない。単語が間言説だと定義される場合には、百科事典が何らかの形で想起されるような書き方がされて

⁴¹ Link; Link-Heer, p. 94.

いることは言説として扱い得ないのである。時代的な傾向を多分に含む文学に適した分析方法や捉え方は、現代文学にどこまで応用することが可能なのだろうか。

上記で確認してきた間言説分析論者の見解を、冒頭にあげたイェリネクの『ミヒヤエル』に当てはめて考えてみたい。この方法論を用いることによっていかなる効果が得られるのだろうか。先ほどあげた引用の中で、言葉の背後に学問分野が潜む専門言説でありうるのは、「画像鮮明度」だけだろう。これは、写真ないし映像技術分野の専門用語である。けれど「die Bildschärfe einstellen(映像鮮明度を合わせる)」というくだりは、引用前半部にある「もっとちゃんと見る」という行為と関連している。同じ例を考察するとしても、間言説分析であれば「die Bildschärfe(画像鮮明度)」は1つの間言説的要素だというだろう。だが、そのように読むときには、なぜ「die Bildschärfe(画像鮮明度)」がここで話題に上るのか、と問うことはできない。そのため、この単語を「間言説的要素」として作品の文脈から切り離した場合には、単語そのものが特別な意味を持っているとは考えにくい。また、その背景にあると間言説分析でならば想定される学問が、テキストの中で何か意味を生成しているとも考えにくい。このピント調整を行うのは、「れっきとした小さな専門家[richtige kleine fachleute]」と呼ばれる子どもたちである。この呼び方は、すでに述べたように、皮肉であって、専門言説の専門と比較できるような真面目で学術的なものを示す表現としては読めない。つまりここでは「画像鮮明度」を間言説分析として読むことも、「専門家」を学問に関わる専門家として読むことも、うまくいかない。

間言説分析は、間言説を分析対象とするが、テキストに含まれる専門言説でもある言葉を見分けられるかが問題となる。言説を言葉から見出す際に、言説が単語に還元されてしまう。これによって、言説を読み取るために必要な意味の関連が切断されてしまい、単語しか問題にできなくなってしまう。そして単語分析は、文脈や前後の関連などを考慮せずに行われるため、文脈に依存する皮肉を読み取ることができない。なお、はじめに見たイェリネクにおける言説分析に着目した先行研究のなかで、中心的な議論対象となっていた権力や認識は間言説分析では全く議論にのぼらない。逆に、先行研究ではイェリネクにおける権力や認識を論じるために、言説分析や権力分析というフーコーの手法が参照されている。言説分析という手法を扱う際に生じているこの落差は一体何なのだろう。これはイェリネクのテキストも含まれる芸術が政治的なも

のとしては受容されにくい状況と関係しているのだろうか。

間言説分析についての検討を終える前に、間言説分析という名称について考えておきたい。リンクやリンク＝ヘアーは「以下で論じる文学理論は、フーコーの言説という概念を基礎として、(生成的な)間言説理論という形で成立した⁴²⁾と述べている。間言説分析論者らは、間言説分析がフーコーの言説分析の発展形である点と、間言説という言葉をフーコー自身が述べた点とを何度も強調している。たとえば、間言説分析という方法論を打ち出したとされるユルゲン・リンクは自身の論文で「フーコー自身(『知の考古学』において)「間言説的布置」について述べている⁴³⁾と記す。それに続いて、リンクはフーコーがいかなる文脈の中で「間言説的布置」について語ったかを説明する。

彼[フーコー]は、間言説的布置について言及することによって、彼自身の分析的な研究結果を引き合いに出している。その研究結果に従えば、17 世紀後半から 18 世紀における富の分析の分類と同じ方法は、[一般]文法や博物学の特徴でもあるという⁴⁴⁾。

この記述によれば、フーコーは『知の考古学』(1969)で、ある特徴が 1 つの学問領域に留まらず、同時代の他の領域にも通用するものであったと述べている。確かに、フーコーは『知の考古学』でその方法論が詳細に説明されている前著『言葉と物』において、古典主義時代の例として富の文法、一般文法、博物学に共通する規則性や支配的な考え方があることを明らかにしている。3 つの学問分野での類似した認識枠

⁴²⁾ „Auf der Basis des Foucaultschen Diskurs-Begriffs ist die im folgenden zugrunde gelegte Literaturtheorie als (generative) *Interdiskurstheorie* entstanden“ (Link; Link-Heer, 1990, p. 92).

⁴³⁾ „Foucault selbst hat (in der *Archäologie des Wissens*) von »interdiskursiven Konfigurationen« gesprochen“ (Link, 1988, p. 285).

⁴⁴⁾ „Er [Foucault] bezieht sich damit [, von »interdiskursiven Konfiguration“ zu sprechen,] auf seinen eigenen analytischen Befund, nach dem bestimmte Verfahren der Klassifikation gleichermaßen für die Reichumsanalyse wie für die Grammatik und Naturgeschichte des späten 17. und 18. Jahrhunderts kennzeichnend seien“ (Link, 1988, p. 285).

組みがこの時点でのフーコーの研究対象なのである。その言い換えが「間言説的布置」ならば、共通する言説を持ったものの配置を表すと考えられ、引用部分はフーコーの解説だと理解できる。また、この時点でリンクはフーコーの原文通り、「間言説的」という形容詞を使っており、「間言説」という名詞は使われていない。先の引用に続けてリンクは、

フーコーにおける以上のような書き方やそれに類似した書き方が広まり、一般化していくなかで、「言説編成」に関する分析を行う際に、原則的に、専門言説的な諸要素と間言説的な諸要素の区別を私は提案したい⁴⁵。

と記す。間を開けず前後に書かれた2つの引用の内容は齟齬をきたしている。2つ目の引用中にリンクは、唐突に「言説編成」の分析で「専門言説的諸要素」と「間言説的諸要素」の区別を提案する。「言説編成」はフーコーの用語で、相互関係をもつ言説全体を表し、「言説」もフーコーの概念として有名である。リンクはフーコーの用語を使いつつも、リンクの作り出した区分である専門言説と間言説という言葉を導入する。フーコーと自分の差異を明示しないことで、あたかも両者に差異がないかのように、2つの言説の区別を提案するのである。言説という概念を間言説と専門言説に分け、それを活用しようとしているのはリンクであって、フーコーではない。フーコーの著作を未読の読者が2分された言説概念をフーコーの概念として受容しかねないような、混同を招きかねない記述もまたリンクによるレトリックとも読める。フーコーと自分の差異を明確に示さないことで、論証されていないにも関わらず、フーコーがすでに論証済みかのように区分を提示しているからだ。

では、フーコーはリンクが引用している箇所で行い、リンクはそこから何を読み取ろうとしたのだろうか。リンクらの間言説分析派の研究者は『知の考古学』4章4節1で使われた「間言説的布置」という言葉だけを抜き取って、「フーコー自身(『知の考古

⁴⁵ „In Ausweitung und Generalisierung solcher oder ähnlicher Formulierungen bei Foucault möchte ich vorschlagen, bei der Analyse »diskursiver Formationen« grundsätzlich zwischen *spezialdiskursiven* und *interdiskursiven* Elementen zu unterscheiden“ (Link, p. 285).

学』において)「間言說的布置」について述べている⁴⁶⁾と記す。この節でフーコーは彼の提唱した考古学という方法実践を説明しており、考古学の手法をとる際には、言説編成、つまり言説の全体を個別化、記述し、それを比較すると述べる。そこで目指されているのは、一般的な形式の明示ではなく、布置それぞれの素描だ。フーコーは、例にあげた古典主義時代の一般文法、富の分析、博物誌を比較対象とするが、これは新たなグループを形成するためでも、限定されたモデルやそれぞれの領域から合理性の形式を再構築しようとしたのでもない。彼が『言葉と物』で試みたのは、相互間で記述しうる諸関係がある程度数ある言説の諸編成という総体だとみなしうるものを出現させることである⁴⁷⁾。フーコーの見解では、例に挙げた3つの学問領域は何らかの関連性を持ち、ゆえに3つの領域は相互に比較可能なものである。比較可能な3つの領域を総体として素描することとの関連で、フーコーは「間言說的布置」という言葉を使っている。これに対して、間言説分析者は、フーコーが分析したとされる専門言説は相互に直接関係し得ないという。それゆえに間言説という仲介を通じてのみ複数の領域は繋がらう。つまり間言説を分析対象とするには、専門言説と間言説の区分が欠かせない。間言説という概念がなければ、文学の特異さを打ち出すこともできない。フーコーの定義に留まっていれば、間言説分析という方法論の大前提である2つに分割された言説のあり方を論じられなくなってしまう。これが、フーコーの論旨を要約せずに『知の考古学』から「間言說的布置」という言葉だけを引用し、言説に新たな意味を付与した理由だと考えられる。

確かにフーコーは、リンクらの述べるように「間言說的布置」という言い方を使用している。この点でリンクの引用を批判することはできない。だが、言葉は文脈に依存したり、多義的でもありうるため、文脈からその意味を確かめる必要がある。リンクの引用は単語だけを抜き出しているので文脈がわからず、フーコーが「間言說的」という形容詞をどのように使ったかがわからないからだ。

⁴⁶⁾ „Foucault selbst hat (in der *Archäologie des Wissens*) von »interdiskursiven Konfigurationen« gesprochen“ (Link, p. 285).

⁴⁷⁾ 『知の考古学』はフーコーの前著『言葉と物』で用いた「考古学」と名付けられた方法論を説明、論じた著作である。

間言說的総体はそれ自体のなかにも、他の言説タイプ(一方では、表象分析、一般的記号論、「イデオロギー」があり、他方では数学、代数の分析、普遍数学設立の試み)との関係におけるグループ形態のなかにもある⁴⁸。

後半の説明によると、間言說的総体は他の言説タイプとの関係におけるグループ形態のなかにある。ここで並列されている言説のタイプは、先ほど例に挙げた3つの学問のように一時代の異なる学問とは違い、フーコーの全時代区分のなかで変容しつつ生じる学問形態である。それらが関係し、形成したグループの中にも、間言說的総体は見出される。次の記述から1点目の「それ自体」とは同時代の異なる言説タイプ同士のことだと理解できる。

この内的小および外的な諸関係は、博物誌、富の分析、一般文法をある特殊なまとまりとして特徴付け、それらのなかに間言說的布置を見て取れるようにする⁴⁹。

この引用では、古典主義時代の3つの学問体系である博物誌、富の分析、一般文法が1つのまとまりを形成している様子が描かれる。まとまりと訳した語は原文では *ensemble* であるため、全体としてある種の調和をもつものだと考えられる。この引用では前の引用で並列されていた異なる時代の学問とは違い、1つの時代区分内の異なる学問が取り上げられている。そのまとまりのなかに間言說的布置が見出せるのであれば、比較される言説の諸タイプが緩やかな繋がりを持ち、そして全体のなかに位置づけられているということである。

『知の考古学』そのものを検討すると、間言説分析論者らのフーコーに関するまとめにはすでに彼ら独自の理解が多く入り込んでいることが分かる。フーコーの著作では、複数の言説が絡み合いまとまりを形成しうる。それは言説が相互に関連しているからだ。その関係こそが相互関係を表す前頭詞 *inter-* であらわされている。例えば、文学と法学という2つの学問分野がそれぞれの特徴や考え方を交換するなかで生まれる

⁴⁸ Foucault 『知の考古学』 p. 240 (fr. pp. 206-207; dt. p. 223). 引用は既訳を参照した拙訳だが、『言説の秩序』および『知の考古学』の翻訳に当たっては筑波大学人文社会科学研究所、山中冴ゆ子さんにも助言を得た。この場を借りてお礼申し上げる。

⁴⁹ Foucault 『知の考古学』 p. 240 (fr. p. 207; dt. pp. 223-224).

研究は、学際的な (*interdisziplinär*) 研究と呼ばれる。このときの前頭詞が間言説 (*Interdiskurs*) の前頭詞と同じである。Inter-を「相互に関係した」という意味で捉えるならば、学問間の隙間に単語として生じるとされる間言説は相互関係という意味を持たない。なぜなら、間言説分析において間言説は、複数の学問をつなぐ橋の役割を担い、文学のなかでは専門用語が一般的で平易な言葉に置き換えられ、使われていると捉えられているからだ。リンクらが使用する間言説という概念は、単に異なるものを結合させ、異なる領域での既存概念の言い換えであって、異なるもの同士の相互関係を意味するものではない。言い換えが相互関係にならないのは、単語の発生という前後関係がはっきりしており、対等な関係ではないからである。間言説分析論者の間言説理解は、フーコーの述べる「間言説的」という形容詞の理解とは異なる。

ここまで見てきた、間言説分析論者らによりずらされた言説の理解は、言説を専門言説と間言説に分類したために起きた問題というよりも、文学を分析するための方法論として間言説分析を訴えようとするあまりに起きたといえる。新たな方法論を打ち出すに当たり、「フーコーも論じた」間言説という、レトリカルな強調は非常に役立つ。なぜならフーコーという世界的に著名な学者の名前を持ち出すことで、研究方法の重要性が補強されるからだ。しかし、こういった重点をすり替えた読み替えこそが、「言説」という概念を「単語」と同義に扱うことを許容し、レトリックの鵜呑みが間言説分析に「フーコーの言説分析の発展形」という地位を与えているのである。

3. フーコーにおける権力分析としての言説分析

現在、ドイツ語圏で「言説分析」であるかのように事典レベルで紹介されている間言説分析という手法が、イエリネクのテキスト分析に応用できないとすれば、別の角度から言説分析を捉えなおさなくてはならない。

これまでの分析からも明らかなように、言説分析はフランスの歴史学者であり哲学者ミシェル・フーコーの方法論である。本論のはじめに、イエリネクのテキストでは言説が分析されていると述べたが、言説とは何を意味し、またそれを分析するとはいかなることなのだろうか。間言説分析で言説分析は単語分析であるかのように論じられていたが、フーコーにおいて言説と単語は同等に扱われているのだろうか。これらを確認

するために本節では、フーコー自身の著作を読み直すことで彼の方法を見直し、言説を分析するとは何かを考え直してみたい。フーコーの方法を模倣した研究は、多くの場合、言説分析と呼ばれる。彼自身は自らの研究に、考古学や系譜学という名称を用いたが、分析対象は一貫して言説であるため、その研究を言説分析と呼ぶこと自体は問題ではない。ここでは彼が言説をどのようなものとして捉え、論じているか、順を追って確認する。その際に、彼の後継者の1人としてアメリカの哲学者、ジュディス・バトラーがフーコーから何を継承したかを参照し、フーコーにおける言説分析の中心的分析対象を明らかにする。

フーコーの用語には揺れがあるものの、言説が詳しく論じられたテキストとしては、コレージュ・ド・フランス教授就任講演の『言説の秩序⁵⁰』(講演は1970年、出版は1971年)が挙げられる。このテキストで彼は、言説を中立なものとは捉えず、非対称な関係を生み出す権力と結びついたものとして描く。言説を形作る手続きとして、排除、注釈、発話する主体の制限の3つが挙げられている。それぞれの手続きはさらに細かく分類されており、排除には、禁止、線引き、非難の3類型がある。1つ目の禁止とは、タブーを作り出したり、状況ごとの儀式を定めたり、発話する主体によって有利な権利が与えられたり、権利が認められなかったりすることを指す。こういった一定の工程を経て、禁止と許可が生じるが、これらの発生に密接関わる言説は非対称の関係を生み出すことにも一役買っている。

言説は単に支配をめぐる戦いや体系を言語に翻訳するものではなく、言説をめぐって、また言説を用いて人々が戦うものこそが言説なのであり、言説とは人々がわがものにしようと努める権力のことである⁵¹。

引用中で、言説それ自体が権力だと定義されている。一般的に、権力とは単に支配・被支配の関係において作用したり、構造を規定するものだと考えられるが、言説自体が権力だとの理解は、そういった一般的な権力理解とは異なる。「どの社会においても言説の生産は、コントロールされると同時に、ふるいにかけられ、組織化され、方向

⁵⁰ Foucault, Michel: *L'ordre du discours*.

⁵¹ Foucault 『言語表現の秩序』 p. 11 (fr. p. 12; dt. p. 11).

を定められていると私は考える⁵²。このようにフーコーが述べるように、言説のあり方そのものが権力であるからこそ、人々はそれをめぐって争い、それを用いて争いもする。言説は権力であるからこそ、何らかの権利を与え、また与えないという機能を持つのである。ここでの権力は、上下間で働くのではなく、目に見えない微細な権力のことである。排除の原則 2 点目は、理性と狂気が例に挙がる線引きである。狂人は古くは真実を述べる者だと考えられたが、のちには理性を持たない者として扱われるようになった。この例から狂人の理解は、時代ごとに変化したとわかる。新たな認識の出現に伴い、有り難い存在としての狂人を隔離すべき存在へと変化させたからだ。この変化をフーコーは、理性や狂気そのものの変化としてではなく、狂人を規定する線引きの変化により引き起こされたと考える。狂人が理性を持たない者だと定義されるようになったとき、理性を持つか持たないかの間に線が引かれる。この線を引くためには、理性が必要だと言説が欠かせない。このように人々の物事の捉え方は言説に規定されており、この認識を支えるのが言説であることから、線引きが権力の一環であることがわかる。3 つ目の排除は、真偽と関わる。狂人の例でも、歴史的に見て狂人の捉えられ方が変化するのに伴って、真実中の真実を述べていた狂人は、真実とは無縁の者になった。同じように、古代ギリシアの真実は現代の真実とは異なるが、古代ギリシアからあまり大きな変化を見せていないのは「真実への意志」、つまり真実を知りたいという欲求である。けれども、ここでは、真実への意志さえも自然的欲求とは捉えられず、フーコーは制度的な基盤のもとで恒常的に強化され、更新されているものと述べている。

第2の手続きは、^{コメント}注釈、作者、学問(分野・体系)からなる。まず、注釈とはどういった手続きのことなのだろうか。フーコーは全ての社会に語られ、繰り返され、変化させられる大きな物語の存在があると想定する。その物語は言説に等しいが、それら全てがつねに語り続けられるのではなく、なかには語られなおされないものもある。それぞれの言説には、重要度が段階的にしるしづけられており⁵³、それぞれの言説は対等な関係にはないからだ。何か語りなおされるときには、すでに語られていたものとそれを

⁵² Foucault 『言語表現の秩序』 p. 11 (fr. p. 10; dt. pp. 10-11).

⁵³ しるしづけられている、とはいえ、言説が問題となるときには、しるしづける能動的主体は問題にはならない。

繰り返したものの間の関係は時間のなかで変化し、同時代であっても様々に発展する。この変化、ないし、ずれは注釈により引き起こされる。変化そのものが注釈と言ってもいい。こういった注釈は一方で新たな諸言説の構築を可能とする。注釈のおかげで言説はある一定の状態に留まり続けるのではなく、変化の契機を持つ。他方で、注釈は、後から生じた言説ないし物語のなかで沈黙のうちに何が分節化されたかを述べるという課題を担う。ここで念頭に置かれている注釈は、法律関係の文章や論文、古典文学の解説といった具体的な文章を指すのではなく、差異の出現によって認識される何かである。なお、語りなおされる場合には、一字一句が語りなおされるのではなく、的を絞って語りなおされることも、全く異なる文脈に書き直される可能性もある。

2 点目の類型は、フーコーが言説の制限原則と呼ぶ作者である。言説分析では作者を調和したものだと認識したり、意味の起源として扱うこと自体に疑問を投げかける。フーコーの考えでは、「作者とは、不安になっているフィクションの言語に対して、統一性、関係性、現実への挿入を与えるもののことである⁵⁴」。言説に作者という制限が加わることで、不安定さが取り除かれ、安定が生まれる。作者が不安な要素を取り除く安定的な存在として機能していることに対してフーコーは疑問を投じる。

最後に、3 点目のタイプの例として挙がるのが、フーコーが第 2 の手続きのなかで際立つと重要視する学問(分野・体系) [Disziplin] である。その理由を彼は次のように述べる。

なぜならそれ[学問]は対象領域、方法論のまとまり、真実とされる命題のコース、規則と定義についての戯れ[jeu/Spiel]、技術と道具の戯れ[jeu/Spiel]によって、自らを定義する⁵⁵。

ここでは、まず、それぞれの学問体系がどのように領域として位置を確認するかが説明されている。学問領域にはそれぞれの真実を定める命題や規則性が存在するため、学問はそれぞれの体系を持つ。逆に言えば、引用中にある項目を兼ね備えていなければ、学問として確立したとは見なされない。また学問内部で認められている真偽は、

⁵⁴ Foucault 『言語表現の秩序』 p. 29 (fr. p. 30; dt. p.21).

⁵⁵ Foucault 『言語表現の秩序』 p. 32 (fr. p. 32; dt. p. 22).

同学問の外側から見た場合に、真偽として認められないこともあり、知の体系はそれぞれに真偽を生み出すと理解すべきである。そのほかにフーコーは次のように述べている。

学問は言説の生産をコントロールする原則である。学問領域は、規則を絶えず再顕在化させる形式を持つアイデンティティの戯れ[jeu/Spiel]によって、自らの境界線を定める⁵⁶。

学問は分野ごとに有効な言説を制御し、また排除する。その場合、学問内部の統一のとれた反復運動が必要とされるが、これは反復運動こそが同一性を引き起こす機能を担うためである。学問内の真実は、こういった規則性の元で永続的に生み出されるのである。なお「戯れ[jeu/Spiel]」という言葉には、同一性の不安定さが含まれている。フランス語では être mis en jeu、ドイツ語には auf dem Spiel stehen という慣用句があり、これは「危険にさらされている」という意味である。ポスト構造主義の議論でよく登場する jeu/Spiel は、こういった慣用句的用法を踏まえた危険や不安定さを象徴する語だといえる。

学問は言説の生産を制御する役割を担う、とフーコーが述べていることに注目したい。言説の制御とは、言説の真偽を規定し、守っていくことでもある。これは、前節で詳しい理解を試みた事典の「言説／言説理論」の項目で、項目の筆者らが支持する方法論である間言説分析に半分のスペースを割いた例に当てはめて考えられる。事典は学問領域の標準的で必然的な知識の集成ともいえ、そこでの内容は学問分野での真偽を保証する。間言説分析は言説分析のなかでも重要な位置を占めることが、事典項目の構成から読み取れる。ということは、この方法論は、同じ項目で軽く触れられただけの研究手法よりも優位な位置を占め、権力を生み出す側におかれることになる。それゆえに、この「正しい」言説に批判的な目を向けることは、危険な状態に身をさらすことだといえる⁵⁷。

⁵⁶ Foucault 『言語表現の秩序』 p. 37-38 (fr. p. 37-38; dt. p. 25).

⁵⁷ このように間言説分析主義者らは、フーコーが批判的に働きを考察する言説という概念の1つの効果をその分析方法を発展させたと述べながら、学問の真なるもの

第3の手続きとして挙げられるのは、言説のコントロールを可能にする「発話する主体の制限[Raréfaction des sujets parlants/ Verknappung der sprechenden Subjekte]」である。言説の秩序に立ち入るためには、定められた要求をクリアし、また、それに参入するための資格を持っていなければならない。要するに、言説の秩序への参加は万人に開かれてはいない。言説の秩序への入場制限こそが、言説を秩序付け、その内部での同一性や真偽が戯れであるにもかかわらず、特定の言説があたかも1つであるかのように、あたかも真実であるかのように見せるのである。

フーコーは講演の終盤で、自らの研究の方向性2つについて述べている。ここでは、前年まで使われてきた「考古学」という研究方法の名称は姿を消し、新たに呼びなおされている。第1は価値を反転させる「批判」、第2は「系譜学」である。批判という観点では、言説による制限という手続きについての分析を行う。ここでは、どのような特殊な要請に応える形で制限や排除などがいかに生じたのか、そしてそれがどのように変化したのか、それによってどのような強制が起こり、またそれがどの範囲まで応用されたのかが問われる。これに対して第2の系譜学という観点は、実際の諸言説の発生に関わるとフーコーは述べている。

批判＝批評は、制限が生じた過程だけではなく、言説の再編成や規格化を分析し、系譜学は、分散されていると同時に、断続的で、規則化された諸言説の発生を研究する。この二つの課題は決して完全に切り離されえない⁵⁸。

以上の記述から、系譜学が言説の発生を問うものであるのに対して、批判は言説の生み出す効果や効力のある範囲、その変化を問うものであることがわかる。ここでも言説の発生は統一したものではなく、分散し、断片的なものだと再確認されている。批判＝批評と系譜学というふたつの方向性は相互に関連しており、あえて切り離して考える必要はなく、切り離すことはできない。

では、言説の発生を問うとはいかなることだろうか。間言説主義者ならば、「時計」と

を生産するという意味で利用している。たとえ学問による言説の生産制御の働きを両者が同様に認識しているとしても、それに対する対応の仕方は正反対だといえる。

⁵⁸ Foucault 『言語表現の秩序』 p. 67 (ft. p. 67; dt. p. 41).

という言葉がいつ生じたのかを調査しようとするかもしれないが、系譜学に従うならば、言葉の起源を探る研究と言説の発生を分析することは異なる。なぜなら、フーコーは言説を単語とは捉えておらず、言説は権力との関係なしには論じえないからである。つまり、言説の発生を問うことは、権力の発生を問うことでもある。権力の発生を分析することこそ、系譜学の課題といえるのである。

フーコーは、定義や方法論などの理論部分に多少の揺れがあることからわかるように、自らの研究方法に揺らぎのない定義を与えてきたとは言い難い。実践的な研究方法の提示は行うものの、系譜学という研究方法そのものに関する記述はほとんど存在しない。そのため、フーコーの系譜学を継承した、アメリカの哲学者ジュディス・バトラーを参照し、彼女のフーコーにおける系譜学理解を手掛かりとしたい。彼女は初期の著作『ジェンダー・トラブル』において、同書の方法論を系譜学だと明記している。

アイデンティティの基盤をなすと考えられているセックスやジェンダーや欲望というカテゴリーが、特定の権力配置の結果として誕生したものであることを示すには、ニーチェの概念をさらに推し進めたフーコーによって「系譜学」と呼ばれている批評方法を、ここで使う必要があるだろう。系譜学的な批評の目的は、抑圧によってこれまで不可視とされてきたジェンダーの起源や、女の欲望の内的真実や、本物で真正な性的アイデンティティを探し出すことではない。そうではなくて、多様で拡散した複数の起源を持つ制度や実践や言説の結果でしかないアイデンティティのカテゴリーを、唯一の起源とか原因と名づける政治上の利害を、探っていくことである⁵⁹。

バトラーは、同著作で、アイデンティティをめぐる問題を扱う。アイデンティティは通常、主体形成の中心や核であり、この核を写し鏡のようにすることで自己同一化が保たれ、調和の取れた主体が形成されると考えられてきた。こういった前提は精神分析の蓄積により、さまざまに問い直されてきたが、自己のモデルや主体が目指すべき目標までもが否定されたとは言い難い。バトラーがこの問題を扱う際に取り上げる核、つまり基盤となるカテゴリーの例は、セックス、ジェンダー、欲望である。これらは主体の発生源として機能し、人間の存在やあり方を統制するものだといわれてきた。バトラーは女

⁵⁹ Butler, p. 9-10 (原文 p. xxix、強調はバトラー)。

というカテゴリーを例に挙げ、女に分類された者たちの同一性に対して疑問を投げかける。同一とされる核を共有すると見られる者たちは、同一だと認識されがちだが、その同一性は自然なカテゴリーではなく、同一で均質なグループとみなす強制が生み出したカテゴリーではないか、とバトラーは問うのである。同時に、アイデンティティだと考えられているものは、実際には均質でないにもかかわらず、そのなかに調和を見る見方が、アイデンティティを均質だとみなすのではないか、という修辞学的問いも投げかけられる。そのような問いは、女性という分類が生物学的身体を存在の源から発生するという認識に対しても投げられている。バトラーは、先ほどのフーコーの引用にあった、分散し、断絶的な諸言説の発生という捉え方を共有しているからこそ、唯一の起源から発生するのではなく、どのようにそれらが調和のとれたものだと思われているか、という問いを立てる。それゆえバトラーは、「ある」と認識されているものを「権力配置の結果として誕生したもの」だと捉えなおすことにより、なぜ生物学的身体という源が必要なのかを論じるのである。そして、このような「政治的な利害」を捉える試みのために、フーコーがニーチェから引き継ぎ、発展させた系譜学という方法を用いると述べる。バトラーにおいて、言説を分析対象とした研究は、権力配置の分析を行う系譜学という方法論に則って展開される。ここでの言説分析が権力の分析であるという理解は、間言説分析には見られなかった見解である。また、フーコーは、権力分析を行う系譜学を批判＝批評と完全には切り離せないと述べていた。それは、権力の分析自体が批判＝批評でもあるからではないだろうか。

系譜学に関してフーコーが直接的に論じたテキストとして、ほとんど唯一と考えられる「ニーチェ、系譜学、歴史」(1971)を見てみよう。

系譜学は、時間をさかのぼり、忘却の拡散のかたに大いなる連続を再建しようというものではない。系譜学の任務は、過去が、時の行程のすべての通過路にそもそもの出発点からすでに線をひかれた 1 つの形を押し付けた後、現在でもちゃんと生きていて、現在をひそかに動かしながら、まだここにあるのだ、と示すことなのではない。[...] 由来の複雑な糸のつながりをたどることは、それとは逆に、起こったことをそれに固有の散乱状態のうちに保つことである。それは、偶発事、微細な逸脱——あるいは逆に完全な逆転——、誤謬、評価の誤り、計算違いなど、われわれにとって価値のある現存物を生み出したものを見定めることである。それは、われわれが認識するものおよび、われわれがそれ

であるところのものの根にあるのは、真理と存在ではなくて、偶発事の外在性であるのを発見することである。ゆえに、おそらくすべての道徳の起源となるものは、それが尊ぶべきものでない限りは——*Herkunft*〔由来・起源——井上註〕は尊ぶべきものであることはけっしてない——批判に価するのである⁶⁰。

系譜学は、ここでは「価値をもった現存物」を発生させたものを見定めることだと定義されている。何らかの現存物が価値を与えられるのは、真理や存在といった価値や源泉があるからではなく、偶発的なことでしかない。この捉え方により、因果関係が否定され、価値の根拠は求められなくなる。逆に、真理や価値の起源の源として機能してきたものは、肯定的であるがゆえに存在しているかのように扱われていた保護膜を引き剥がされ、批判の対象となる。フーコーは何かは今在のように見えることを、原因と結果という直線的な関係ではなく、より複雑なものとして捉えようとしている。現存物の由来をたどる際にも、彼はばらばらに起こったものを散乱した状態のまま捉えようとしている。フーコーはニーチェを解釈しながら、起源を本来あるとみなされているものだと捉え、偶然起こったこととして理解する。偶発と外在という 2 つの言葉で強調されているのは、結果の起点となる源が原因を内に秘めるといった認識の否定だからである。そのために、価値の規定に貢献する起源に対しての批判は、批判に値すると述べられている。

系譜学にとって重要なのは、認識を因果論に還元せずに偶発性として捉え、言説や権力の発生を問うこと、同時にそれが、価値を持った現存物に対する批判となりうることである。因果関係や歴史的な変遷を問わないこの手法において、言説や権力の発生は、遡らなければ到達できない過去にあるのではなく、恒常的に起こっていることだ。常に生み出される言説や権力がここでの分析対象なのである。

言説分析は権力分析のことである。この方法論を使うと、権力がどのような条件化で生じ、それがいかに認識を規定する真偽を生み出しているのかを問い直す契機が生じる。真偽が定められるのは偶発であるにもかかわらず、当たり前であるかのように受け止められ、誰にも問い返されることのない安定した位置が確保される。この状況を生

⁶⁰ Foucault 「ニーチェ、系譜学、歴史」、p. 18-19 (fr. p. 141; dt. p. 172、強調はフーコー)。

み出し、可能にしているのが、言説である。言説が特定の論理を可能にするときには、必ず排除の力が働いており、特定の論理に反するものは不可視な状況に追いやられている。フーコーやバトラーはこういった言説の権力関係を見直すことで、特定の論理が可能となることにより、何が起きているのかを分析している。バトラーは現状のセックスやジェンダー、欲望を基盤にアイデンティティが存在するかのように見られている現状を見直そうとすると、言説を分析することで権力配置を明らかにし、その配置こそが政治的利害に貢献していると述べる。

本論文のはじめで行った、イェリネクの『ミハエル』の分析をもう一度考えてみたい。

あんたたちのことでひとつ気に食わないことがあんのよ。いっつも誰かのせいにするところ。階段から転げ落ちるときや車に轢かれるときや職を失うときにはもっとちゃんと見なきゃいけないのよ。

そんなときにはそう画像鮮明度を合わせる。〔調節用の〕つまみは目で見て分かるくらいの大きさはあるでしょ。ねえ違う？ あんたたちのうち何人かはそういうことに関しちゃれっきとした小さな専門家に成長済み。残りの子はまあしっかりお勉強しなくちゃね⁶¹。

1 段落目では、人に責任を擦り付けることと、不慮の事態に陥った人間を責め責任を押し付ける責任転嫁がテーマにあがる。後者では、皮肉を用いて、暴力を振るわれ、目に見える身体的な外傷を負った人間に責任を押し付け、解決策を提示しないまま無視するという暴力が描かれている。この例に言説分析という観点を加えるならば、単に責任転嫁や暴力が語られているだけではなく、言説が身体的暴力と責任転嫁を弱者に押し付け、弱者を弱者の位置に留まらせていることが、皮肉を用いて描き出されていることがわかる。読者はその際、まず皮肉の合図に気づき、伝えられているメッセージを受け取れなければ、暴力が隠されていることすらわからない。2 段落目では、

⁶¹ „bloss eines stört mich an euch: immer sollen die andren schuld sein. ihr müsst schon besser schauen wenn ihr die stiege herunterfallt oder überfahren werdet oder eure stellung verliert. /da stellt man eben die bildschärfe genauer ein. der knopf ist doch wohl gross genug dass ihr hin seht. nicht? manche von euch haben sich dabei zu richtigen kleinen fachleuten entwickelt. die andren müssen allerdings noch fest üben“ (Jelinek, *Michael*. p. 7).

責任転嫁の問題は姿を消し、「あんたたち[ihr]」がテレビの前に縛りつけられる。習得した操作力を発揮して鮮明な画面で見ることが推奨されているからだ。十分な操作力がなければならないという法則性は、それに従わせる力を持つ。このように幾つものテーマが 1 つの頁のなかに散らばり、それぞれの言説の生み出す基準がそれぞれに権力を引き起こしている状況が描かれていることが分かる。加えて、「画像鮮明度をあわせる」という言い方は、単にテレビの画像調整だけではなく、画像を鮮明にすることで、はっきりとした認識の獲得を要請している。その意味では、短い文章には、単にテレビ受信機のつまみをひねればよいという助言だけではなく、いかにメッセージを読み取り、認識にいたるかというより難解な問題が含まれている。

イエリネクはさまざまな言説を配置することで、彼女自身の言葉を使えば、「すでに存在する発言」で「さまざまな言語の次元を作り出す」ことで、権力がどのように発生しているかを分析している。1 段落目では、一方的な語り手が「あんたたち」に向かって話すが、語り手と語られている側には、はっきりとした立場の違いがあり、「あんたたち」は非難される側にいる。非難や責任転嫁が一方にしか許されない行為であるならば、これはフーコーの述べる線引きである。また、引用の 1 行目「あんたたちのことでひとつ気に食わないことがあんのよ」は、内容と一致した調子を使ってテキストで再現されている。2 段落目では、テレビの巧みな操作、言い換えれば専門性が要求されている。操作や専門性は繰り返された訓練の成果であるから、課題を懸命に習得したということである。目標や課題の達成により専門性を高め、遂行可能な範囲の拡張は教育現場や業績主義社会における基本原則である。教育や業績主義は、(特に資本主義経済の)社会で言説を通じて要求される。このように、イエリネクのテキストを言説分析が行われているテキストとして見る場合に、テキストの読み手は、単語単位ではなく、特定の論理を伴う言説を見なければ、彼女がいかなる言説及び権力を分析しているかは見えてこない。

フーコーは、言説によっていかに制限が作り出され、基準に従わせる規格化が行われているかを分析することを批判＝批評だと述べていた。バトラーは、言説が唯一の起源や原因と呼ばれているものが必要な理由を、政治上の利害だと記している。イエリネクは、言説がどういった基準や制限を作り出すかを分析しているからこそ、テキスト内でその言説を再現できる。読者は、再現された言説から、イエリネクの分析の再構

策を挑む。散りばめられたそれぞれの言説はテキストのなかで、網目状に絡み合い、そして権力を発生させている。そこで発生させられた権力を必要としているのが、政治上の利害である。権力がいかに発生しているかを分析したものが、イェリネクの文学テキストである。このように見えることではじめて、彼女のテキスト自体をマルクス主義的な社会批評ではなく、言説分析的な社会批判として理解できるようになる。イェリネクの作品が社会批判的であることは、作家自身が過去に共産黨員であったというような政治的立場からではなく、彼女の書き方を言説分析的に読み解くことから明らかにできる。だが、間言説分析という方法を参照したのでは、単語と言説という分析単位の違いと権力分析という視点の欠如から、この結論には至れなかった。ドイツ語圏のドイツ文学研究においては、間言説分析が文学研究で応用された言説分析だという理解がある程度の知名度を持ち、事典の論理展開を確認したように、領域全体がこの状況の再考を妨げている。このような状況がイェリネクのテキストと言説分析の出会いにとって障壁として現れてしまったのではないだろうか。

イェリネクの文学テキストは鋭敏な(社会)批評＝批判である。この側面を作家自身の言動からではなく、テキストに見出そうとする場合、フーコーの言説分析という方法は多くの示唆を与えるのである。なぜなら、権力の分析は社会批判や、特定の言説に従うことで生み出される政治的な利害の検証を可能にするからだ。文学テキストの持つ政治性を明らかにするためには、権力の分析を度外視した間言説分析ではなく、フーコーや彼の方法論を引き継いだバトラーを参照しながら、イェリネクのテキスト分析に応用していく必要がある。そうすることによって初めてイェリネクの文学テキストがどのように問題を輪郭づけ、それを通して何を発言しているかを論じられるようになるはずだ。

【参考文献一覧】

Brockhaus Enzyklopädie in 30 Bänden. F.A.Brockhaus, Leipzig/Mannheim, 2006.

Burdorf, Dieter; Fasbender, Christoph; Moennighoff, Burkhard (Hg.): *Metzler Lexikon Literatur*. Metzler, Stuttgart/Weimar, 2007.

Butler, Judith: *Gender Trouble. Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge, London/ New York, 1990; 1999, xxix (『ジェンダー・トラブル』、竹村和子訳、青土

社、1999、p. 9-10).

Der Literaturbrockhaus in 8 Bänden. B. I. Taschenbuchverlag, Mannheim, 1995.

Foucault, Michel: *L'Archéologie du savoir*. Gallimard, Paris, 1969 (*Die Archäologie des Wissens*. ü.v. Köppen, Ulrich; Suhrkamp, 1981、『知の考古学』、中村雄二郎訳、河出書房新社、1985).

Foucault, Michel: *L'ordre du discours*. Gallimard, Paris, 1971 (*Die Ordnung des Diskurses*. Fischer, Frankfurt am Main, 2004; 中村雄二郎訳『言語表現の秩序』、河出書房新社、1989(1981)).

Foucault, Michel: Nietzsche, la généalogie l'histoire [1971]. In: Ders.: *Dits et écrits*. II 1970-1975. Gallimard, Paris, 1994, pp. 136-156. (Nietzsche, die Genealogie, die Historie. In: Ders.: *Schriften*. Bd. II 1970-1975. Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2002, pp. 166-191; 「ニーチェ、系譜学、歴史」、伊藤晃訳、『フーコー・コレクション 3』(『思考集成 IV』、No. 84)、筑摩書房、2006、pp. 358-359).

藤井啓司「革命と変動の時代——1789 年から 1830 年代まで」、柴田翔編著『はじめて学ぶドイツ文学史』、ミネルヴァ書房、2003、pp. 105-154.

Gerhard, Ute; Link, Jürgen; Parr, Rolf: Diskurs und Diskurstheorien. In: Nünig, Ansgar (Hg.): *Metzler Lexikon Literatur- und Kulturtheorie*. Metzler, Stuttgart/Weimar, 2001, pp. 115-117.

Heselhaus, Herrad: „Textile Schichten“. Elfriede Jelineks Bekenntnisse einer Klavierspielerin. In: Heilmann, Markus; Wägenbauer, Thomas (Hg.): *Im Bann der Zeichen. Die Angst vor der Verantwortung in Literatur und Literaturwissenschaft*. Königshausen & Neumann, Würzburg, 1998, pp. 89-101.

Janz, Marlies: *Elfriede Jelinek*. Metzler, Stuttgart, 1995.

Jean Paul: Abschieds-Rede bey dem künftigen Schlusse des Morgenblatts. In: *Morgenblatt für gebildete Stände*. Tübingen, 1807, Nro. 1, Donnerstag, 1. Jänner.

Jelinek, Elfriede: *Michael. Ein Jugendbuch für die Infantisgesellschaft*. Rowohlt, Reinbek, 2004 (1972).

- »Ich schlage sozusagen mit der Axt drein«. In: *Theaterzeitschrift*. H. 7, Frühjahr '84. edition text+kritik, München, pp. 14-16.

- Ironie unter der Straßenwalze [interviewt von Volker Oesterreich]. In: *Berliner Morgenpost*. Sonntag, 27. Feb., 2000.

Köppe, Tilmann; Winko, Simone: Diskursanalyse. In: Anz, Thomas (Hg.): *Handbuch Literaturwissenschaft*. Bd. 2, Metzler, Stuttgart/Weimar, 2007.

Kuhn, Dorothea (unter Mitarbeit von Kunz, Anneliese; Pehle, Margot): *Cotta und das 19. Jahrhundert. Aus der literarischen Arbeit eines Verlages*. (Marbacher

- Kataloge Nr. 35). Deutsche Schillergesellschaft Marbach, 1980.
- Link, Jürgen: Literaturanalyse als Interdiskursanalyse. Am Beispiel des Ursprungs literarischer Symbolik in der Kollektivsymbolik. In: Fohrmann, Jürgen; Müller, Harro (Hg.): *Diskurstheorien und Literaturwissenschaft*. Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1988, pp. 248-307.
- Link, Jürgen; Link-Heer, Ursula: Diskurs/Interdiskurs und Literaturanalyse. In: *LiLi. Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik*. Jg. 20/1990, H. 77. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, pp. 88-99.
- Lücke, Bärbel: *Jelineks Gespenster. Grenzgänge zwischen Politik, Philosophie und Poesie*. Passagen Verlag, Wien, 2007.
- Parr, Rolf: Diskursanalyse. In: Schneider, Jost (Hg.): *Methodengeschichte der Germanistik*. De Gruyter, Berlin, 2009, pp. 89-107.
- Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft*. Bd. I. de Gruyter, Berlin/New York, 1997.
- Springer, Michael: Elfriede Jelinek. In: *Neues Forum*. Nov. 1972, p. 60.
- Szalay, Eva Ludwiga: Of Gender and the Gaze. Constructing the Disease(d) in Elfriede Jelinek's Krankheit oder Moderne Frauen. In: *German Quarterly*. 2001, Vol. 74-3, pp. 237-258.

